日常記憶に関する自己評価の分析

——メタ記憶質問紙による検討——

清水寛之 神戸学院大学 高橋雅延 聖心女子大学 齊藤智 京都大学

Analysis of self-assessment of everyday memory using metamemory questionnaires

Hiroyuki Shimizu (*Kobe Gakuin University*), Masanobu Takahashi (*University of the Sacred Heart*),
and Satoru Saito (*Kyoto University*)

Several metamemory questionnaires have been widely used in psychological research with various populations including young or elderly, and clinical or non-clinical participants. This study investigates the factor structures in three typical metamemory questionnaires. The Everyday Memory Questionnaire (EMQ: 28 items), the Cognitive Failures Questionnaire (CFQ: 25 items), and the Memory Ability Questionnaire (MAQ: 31 items) were administered to 860 undergraduate students. Factor analyses for the data from each questionnaire indicated that the EMQ, the CFQ, and the MAQ mainly consisted of five, five, and four factors, respectively. A factor analysis was performed on the combined data relating to these 14 factors to examine the relatedness among the factors. Three factors were obtained: retrospective memory, prospective memory, and memory for person's names. The results were discussed in terms of the differences of content and formats of the questionnaire.

Key words: everyday memory, metamemory, memory behavior, memory questionnaire.

The Japanese Journal of Psychology

2006, Vol. 77, No. 4, pp. 366-371

近年、日常生活場面における人間のさまざまな記憶行動や記憶能力への関心が高まっている (Cohen, 1996)。そうした関心に基づいて、日常記憶に関する行動の観察・分析、日常的な刺激材料を用いた記憶実験などとともに、質問紙調査を通じて個人の日常記憶について自己報告を求め、その根底にある記憶過程を捉えようとする試みがいくつかなされている。

Herrmann (1982, 1984) によれば、記憶に関する質問紙は、調査協力者に対して日常生活場面での知識や出来事の再生・再認を求め、その記憶能力を測定するものと、調査協力者自身がそうした知識や出来事の再生・再認を意識的にどのように受けとめているのかを尋ねるものに分かれる。前者は記憶質問紙 (memory questionnaire)、後者はメタ記憶質問紙 (metamemory questionnaire) と呼ばれている。メタ記憶とは一般に、記憶にかかわる個人の認識や知識のことを指し、自己の記憶行動や自らが直面している記憶状況を監視・評価・制御するための広範な認知過程を含んでいる。メタ記憶質問紙は、調査協力者個人の記憶信念

(memory belief) 及び自らの記憶行動や記憶能力に関する主観的評価や回想的判断を調べるものであり、人間のメタ記憶の構造を理解するための有効な手がかりを提供してくれる。楠見・高橋 (1992) はメタ記憶質問紙を、さらに、(a) 記憶能力の自己評価に関するもの、(b) 記憶方略の利用に関するもの、(c) 記憶の障害の受けやすさに関するもの、の三つに大別している。本研究は、このうち主として (a) の記憶能力の自己評価に関するメタ記憶質問紙を用いて、日常生活場面での個人の記憶行動の背後にあるメタ記憶の構造の一端を明らかにすることを目的としている。

メタ記憶質問紙のなかでも、Sunderland, Harris, & Baddeley (1983, 1984) によって開発された日常記憶質問紙 (Everyday Memory Questionnaire: 以下 EMQ とする) はとくに、健常者のみならず高齢者や脳損傷患者などを対象にさまざまな臨床場面で多用されている (Boake, Freeland, Ringholz, Nance, & Edwards, 1995; Seltzer, Vasterling, Hale, & Khurana, 1995)。また、EMQ は、日常生活場面でのより一般的な認知的行動遂行にかかわる認知的失敗質問紙 (Cognitive Failures Questionnaire: 以下 CFQ とする; Broadbent, Cooper, FitzGerald, & Parkes, 1982) の内容とも一部重複していることが知られている

Correspondence concerning this article should be sent to: Hiroyuki Shimizu, Department of Psychology, Faculty of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University, Arise, Nishiku, Kobe 651-2180, Japan (e-mail: shimizu@human.kobegakuin.ac.jp)

(Pollina, Greene, Tunick, & Puckett, 1992)。

これらの質問紙の場合、調査協力者に対して、特定の記憶行動や記憶経験、記憶現象などが、どの程度の頻度で生起するかの判断が求められる。EMQでは“最近6カ月で1回もない”から“日に1回以上ある”までの9段階の絶対的頻度評定が求められ、CFQでは過去6カ月間に“まったくない”から“非常によくある”までの5段階の相対的頻度評定が求められる。メタ記憶質問紙の一環として、楠見(1991)も、日常生活における記憶能力質問紙(Memory Ability Questionnaire: 以下MAQとする)を開発している。この質問紙の場合、特定の記憶行動や記憶現象だけでなく個人の全般的な記憶能力を表す記述文に対して、調査協力者は“まったくあてはまらない”から“非常にあてはまる”までの5段階で適合度の評定を行うよう求められる。

こうしたEMQ, CFQ, 及びMAQについてはそれぞれ、通常の一般成人(大学生など)を対象に調査が実施され、それらの結果に対して因子分析がなされ、因子構造が明らかにされている。Cornish(2000)は、大学生に対して28項目からなる改訂版EMQを実施し、日常記憶が“検索(retrieval)”, “課題モニタリング(task monitoring)”, “会話モニタリング(conversational monitoring)”, “空間記憶(spatial memory)”, 及び“活動の記憶(memory for activities)”という5因子から構成されていることを明らかにしている。CFQについては、Broadbent et al.(1982)が日常生活場での認知的失敗行動は下位カテゴリーを設けるのではなく、全25項目の得点合計が全体的な失敗のしやすさを表すとしている。山田(1999)は、このCFQに、より広範な失敗行動に関する項目を加えて調査を行ったところ、もとのCFQの項目はほぼすべて一つの因子に関連していることを見出した。MAQについては、楠見(1991)によれば、自己の記憶能力は“検索困難、意図的想起の失敗経験”, “頭から離れない記憶、回想的記憶、無意図的想起”, “もの忘れ、無意図的忘却、回想・未来記憶想起の失敗”という3因子から構成されている(ここでの“未来記憶”は“展望記憶”と同義)。

このように、それぞれのメタ記憶質問紙において見出される因子は異なっており、それらがどのように関連しているのかに関心もたれる。そこで、本研究はこれまでのメタ記憶質問紙を用いた主な研究の結果に基づき、一般成人(大学生)を対象に質問紙調査を実施し、日常記憶行動にかかわる因子間の関係を明らかにする。具体的には、EMQ, CFQ, 及びMAQを同一の調査協力者に実施し、その結果に対して因子分析を行い、それぞれの因子構造を確認したうえでいくつかの質問項目群に整理し、それらの関係を総合的に検討する。

方 法

調査時期 調査は1999年12月から2001年7月にかけて行われた。

調査協力者 神戸学院大学、日本大学、聖心女子大学、大阪教育大学の大学生、合わせて860名が調査に協力した。

質問紙 EMQ, CFQ, 及びMAQの質問紙を1冊にまとめた冊子が作成された。

EMQについては、日常生活場面での特定の記憶行動や記憶現象を表す記述文(全28項目、たとえば、“物を置いた場所を忘れる。身の回りの品物をなくす”)に対して、その出現頻度を“最近6カ月で1回もない”, “最近6カ月で1回くらい”, “最近6カ月で1回以上、月に1回以下”, “月に1回くらい”, “月に1回以上、週に1回以下”, “週に1回くらい”, “週に1回以上、日に1回以下”, “日に1回くらい”, “日に1回以上”の9段階で評定するよう求められた。なお、EMQには、オリジナル版(Sunderland et al., 1983)と改訂版(Sunderland et al., 1984)と簡易版(Tinson & Lincoln, 1987)の3種類があるが、調査協力者が健常者であることなどの理由により、改訂版EMQが用いられた。

CFQについては、日常生活場での認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部(全25項目、たとえば、“本などをよく考えないで読み過ぎてしまったために、もう一度読み直さなければならないことが”)に対して、その出現頻度を過去6カ月の間で“まったくない”, “めったにない”, “ときどきある”, “かなりよくある”, “非常によくある”の5段階で評定するよう求められた。

MAQについては、日常記憶行動に関連した特定の個人的傾向や特徴を表す記述文(全31項目、たとえば、“よく忘れものをする”)に対して“全くあてはまらない”, “あまりあてはまらない”, “どちらでもない”, “かなりあてはまる”, “非常にあてはまる”の5段階で自己の適合度を評定するよう求められた。

調査手続き 大学の授業時間などを利用して、調査協力者に質問紙の冊子が配布され、回答の仕方が説明されたあと、自己ペースでの回答が求められた。回答時間は、15-20分程度であった。

分析方法 質問紙の回答に不備のあった者を除き、809名(男性283名、女性509名、性別不明者17名: 平均年齢19.6歳)分のデータを分析対象とした(有効回答率94.1%)。EMQ, CFQ, 及びMAQの各項目への反応に対して、それぞれ、上記の反応の順に1-9, 0-4, 1-5の点数が与えられて得点化された。

この反応データに対してSPSS(Ver. 10)を用いて因子分析が行われた。EMQ, CFQ, 及びMAQのそれぞれについて、最尤法によって因子が抽出された後

にプロマックス回転が行われた。ただし、MAQ については、予備分析によって共通性が低く、先行研究(楠見, 1991)でも除外されている 1 項目(“記憶力が良い方である”)を除いて分析がなされた。さらに、抽出された因子ごとに負荷量の比較的高い項目群をまとめ、それらの項目群間の相関が求められた。

結 果

EMQ の因子構造 28 項目全体の信頼性係数(Cronbach's α)は.92 で、一つの質問紙として内的一貫性の高いことが示された(先行研究である Cornish (2000) では $\alpha=.90$)。因子分析の結果、固有値の減衰の様子と因子の解釈可能性を考慮して 5 因子解が適当であると判断された¹。第 1—5 因子ごとに負荷量.35 以上の項目だけを取り上げると、それぞれの項目群の信頼性係数(α)は.64—.84 の範囲にあり、ある程度の信頼性が認められた。

第 1 因子には、日常場面での出来事や行為、発話に関する失念や忘却に関連した項目が多く含まれていた。第 2 因子は、自らの過去の活動や行為に関する忘却に関連していた。第 3 因子は、特定の記憶課題場面で、通常ならば容易に想起できそうな熟知性の高い事柄であるにもかかわらず、想起できないという状態に関連していた。第 4 因子は、他者とのコミュニケーションの場で記憶の混乱や忘却が生じることに関連していた。第 5 因子は場所の記憶に関連していた。

これら第 1—5 因子はそれぞれ、Cornish (2000) の結果における第 1 因子“検索”、第 5 因子“活動の記憶”、第 2 因子“課題モニタリング”、第 3 因子“会話モニタリング”、第 4 因子“空間記憶”、にほぼ対応していると考えられる。そのため、以下では Cornish (2000) による因子の命名を準用することにした。

CFQ の因子構造 25 項目全体の信頼性係数(α)は.89 で、一つの質問紙として内的一貫性の高いことが示された(先行研究である Broadbent et al. (1982) では $\alpha=.79$)。因子分析の結果、固有値の減衰の様子と因子の解釈可能性を考慮して 5 因子解が適当であると判断された。第 1—5 因子ごとに負荷量.35 以上の項目だけを取り上げると、それぞれの項目群の信頼性係数(α)は、第 4 因子 ($\alpha=.51$)を除けば、.71—.81 の範囲にあり、比較的高い信頼性が認められた。

第 1 因子は、場所や位置、方向性に関する認知的失敗行動に関連した項目が多く含まれており、“空間的失敗”と命名された。第 2 因子は、注意が散漫になっていたか、当該の記憶課題から気がそってしまうといった状態(absent-mindedness)の出現頻度と関連しており、“うっかり、ぼんやりの失敗”と命名された。

第 3 因子は、想起時の失敗に関連しており、“検索失敗”と命名された。第 4 因子は、人名の記銘や想起に関する失敗に関連しており、“人名記憶の失敗”と命名された。第 5 因子は、相手との約束や自らが決めた事柄を失念していることに関連しており、“約束の失敗”と命名された。このように、従来の研究(Broadbent et al., 1982; 山田, 1999)では 25 項目全体で一つの“認知的失敗”を示すと考えられていたが、本研究の結果では認知的失敗行動が五つの因子から構成されていることが示された。

MAQ の因子構造 30 項目全体の信頼性係数(α)は.56 で、一つの質問紙として内的一貫性はさほど高くないことが示された(先行研究である楠見 (1991) には α の記載なし)。因子分析の結果、固有値の減衰の様子と因子の解釈可能性を考慮して 4 因子解が適当であると判断された。第 1—4 因子ごとに負荷量.35 以上の項目だけを取り上げると、それぞれの項目群の信頼性係数(α)は.52—.67 の範囲にあり、信頼性がやや低いことが示された。

第 1 因子は、全般的に忘却が多いことや、展望記憶に関する失念の傾向に関連している。第 2 因子は、ある種の光景や画像が無意図的に想起されることに関連している。第 3 因子は、想起の意図があっても、うまく当該の情報を検索できないでいる状態に関連している。第 4 因子は、人の名前が想起できないことに関連している。

これら 4 因子のうち、第 1—3 因子はそれぞれ、楠見 (1991) の結果における第 3 因子“もの忘れ、無意図的忘却、回想・未来(展望)記憶想起の失敗”、第 2 因子“頭から離れない記憶、回想的想起、無意図的想起”、第 1 因子“検索困難、意図的想起の失敗経験”にほぼ対応していると考えられる。本調査結果における第 4 因子は、新たに“人名の想起困難”と命名された。

質問項目群間の関係 前述のとおり、EMQ、CFQ、及び MAQ による質問紙調査の結果、日常記憶に関連して、合わせて 14 の因子が抽出された。それぞれの因子に対する負荷量の絶対値.35 以上の項目をまとめ、14 の項目群が構成された。調査協力者ごとに、各項目群に含まれる項目の得点を合計し、項目群の得点とした。ただし、MAQ の第 20 項目については、当該の因子への負荷量が負の値を示したために、もとの“全くあてはまらない”から“非常にあてはまる”までの 5 段階の評定反応に対してあらためて 5—1 点を与えて得点化し直した。これらの項目群得点をもとに、14 の項目群の間の相関係数が算出された(Table 1)。

前述の各質問紙における全項目の信頼性係数にも反映されているように、全体として、EMQ と CFQ では、それぞれに含まれる項目群同士は比較的高い

¹ 紙数制限のために、EMQ、CFQ、MAQ のそれぞれの質問項目及び因子分析結果については割愛した。関心のあるかたは、第 1 著者まで請求してもらいたい。

Table 1
EMQ, CFQ, 及び MAQ の質問項目群の相関

メタ記憶質問紙項目群	EMQ					CFQ					MAQ			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
EMQ														
1 検索	—	.61	.48	.59	.43	.49	.54	.51	.41	.36	.42	-.16	.35	.31
2 活動の記憶		—	.35	.50	.45	.43	.40	.44	.52	.31	.53	-.05	.29	.27
3 課題モニタリング			—	.33	.31	.29	.19	.26	.28	.30	.25	-.14	.14	.28
4 会話モニタリング				—	.39	.43	.45	.42	.30	.26	.28	-.01	.22	.23
5 空間記憶					—	.55	.24	.33	.31	.23	.38	-.08	.23	.17
CFQ														
6 空間的失敗						—	.50	.51	.46	.35	.42	-.13	.34	.25
7 うっかり, ぼんやりの失敗							—	.51	.43	.34	.30	.01	.33	.21
8 検索失敗								—	.35	.37	.38	-.07	.31	.27
9 約束の失敗									—	.36	.55	-.07	.27	.28
10 人名記憶の失敗										—	.29	-.10	.21	.71
MAQ														
11 もの忘れ, 無意図的忘却, 回想・未来(展望)記憶想起の失敗											—	-.13	.29	.31
12 頭から離れない記憶, 回想的想起, 無意図的想起												—	-.13	-.10
13 検索困難, 意図的想起の失敗経験													—	.23
14 人名の想起困難														—

注) 個々の因子に対する負荷量.35以上の項目だけを対象とした。

一つの目安として, 相関係数.40以上の数値を太字で示した。

相関係数は, .091以上で1%水準で, .069以上で5%水準で有意になる ($df=807$)。

く, 互いに強く関連している。それに対して, MAQを構成する四つの項目群の間ではいずれもかなり相関が低く, これらの項目群は比較的独立性が高いことが示唆される。とくに MAQの第2因子“頭から離れない記憶, 回想的想起, 無意図的想起”に負荷量の高い項目群は, 他のどの項目群とも相関が低かった。

これら14の項目群の得点に対して, 前述と同じ因子分析が行われた。14項目群全体の信頼性係数(α)は.80で, 内的一貫性はある程度高いことが示された。因子分析の結果, 固有値の減衰の様子と因子の解釈可能性を考慮して3因子解が適当であると判断された。第1—3因子ごとに負荷量.35以上の項目だけを取り上げると, それぞれの項目群の信頼性係数(α)は.62—.83の範囲にあり, ある程度の信頼性が認められた(Table 2)。第1因子には, EMQの全5因子に対応した項目群とCFQのなかの“うっかり, ぼんやりの失敗”と“検索失敗”と“空間的失敗”とに対応した項目群の, 合わせて八つの項目群において比較的高い負荷量が見られた。この因子は, 大まかに, 広く日常生活における全般的な回想的記憶に関連していると考えられる。第2因子は, MAQの“もの忘れ, 無意図的忘却, 回想・未来(展望)記憶想起の失敗”とCFQの“約束の失敗”の二つの項目群において高い負荷量が見られた。この因子は, どちらかといえば, 日常場

面での将来の行為や約束事に関係しており, 展望記憶に対応している。第3因子は, CFQの“人名記憶の失敗”とMAQの“人名の想起困難”の二つの項目群に高い負荷量が見られた。この因子は, とくに人の名前の記銘と想起に関連していると考えられる。

考 察

本研究は, 代表的なメタ記憶質問紙であるEMQ, CFQ, 及びMAQという三つの質問紙を大学生に与え, 各質問紙の因子構造を検討した。その結果, EMQ, CFQ, 及びMAQからそれぞれ, 5因子, 5因子, 4因子が抽出された。EMQの結果については, 先行研究(Cornish, 2000)の結果とほぼ一致した。CFQについては, 従来, 1因子構造であるとされてきたが(Broadbent et al., 1982; 山田, 1999), 本研究では5因子が抽出された。MAQについては, 先行研究の結果では3因子が示されていたが, 本研究結果では新たに1因子増え, 4因子が抽出された。

これらの合わせて14の因子に対して負荷量の比較的高い項目をまとめて, 14の項目群に整理し分析したところ, それらの項目群は, (a) EMQの全5因子とCFQの3因子を含む全般的な回想的記憶に関連したもの, (b) CFQとMAQの一部の因子に対応した全般的な展望記憶に関連したもの, (c) CFQとMAQ

Table 2
EMQ, CFQ, 及び MAQ の質問項目群の因子分析の結果

項目群	F1	F2	F3	共通性
第 1 因子：回想的記憶 ($\alpha = .78$)				
EMQ の“検索”	.85	-.01	-.02	.69
EMQ の“会話モニタリング”	.83	-.15	-.06	.51
CFQ の“うっかり, ぼんやりの失敗”	.64	-.03	.05	.43
CFQ の“検索失敗”	.55	.08	.08	.42
CFQ の“空間的失敗”	.50	.22	.03	.46
EMQ の“活動の記憶”	.46	.38	-.06	.56
EMQ の“課題モニタリング”	.43	.02	.10	.24
EMQ の“空間記憶”	.42	.23	-.06	.33
MAQ の“検索困難, 意図的想起の失敗経験”	.28	.19	.00	.19
第 2 因子：展望記憶 ($\alpha = .62$)				
MAQ の“もの忘れ, 無意図的忘却, 回想・未来(展望)記憶想起の失敗”	-.10	.88	-.01	.66
CFQ の“約束の失敗”	.08	.60	.08	.49
MAQ の“頭から離れない記憶, 回想的想起, 無意図的想起”	-.02	-.12	-.04	.02
第 3 因子：人名記憶 ($\alpha = .83$)				
CFQ の“人名記憶の失敗”	.03	-.05	1.01	1.00
MAQ の“人名の想起困難”	-.02	.10	.67	.51
因子間相関				
	F2	.69		
	F3	.46	.42	

注) 当該因子に対する負荷量 .35 以上の項目群の数値を太字で示した。

の一部の因子に対応した人名の記憶に関連したもの、の三つに大きく分かれることが示唆された。また、とくに MAQ の“頭から離れない記憶, 回想的想起, 無意図的想起”という項目群は、他のいずれの項目群とも相関が低かった。因子分析の性質上、相関の高い項目群が少なくとも二つ以上なければ一つの因子として抽出されにくいと考えられるために、この項目群もまた、上記の 3 因子(回想的記憶, 展望記憶, 人名記憶)とは別に、比較的独立性の高い領域を表しているのかもしれない。

質問紙間の関係を見てみると、EMQ と CFQ のなかの項目群同士で比較的高い相関を示すものが多く、MAQ と CFQ とは一部の記憶行動(展望記憶と人名記憶)を共通して捉えていた。言い換えれば、EMQ には、こうした展望記憶や人名記憶に関連した項目がほとんど含まれていなかったことになる。

EMQ と CFQ の場合に比べて、MAQ の内的一貫性が低く、MAQ における二つの因子が EMQ 及び CFQ のいずれの因子とも相関が高くなかったという点で、MAQ は、他の二つのメタ記憶質問紙よりも独自性が高いと言えるだろう。このことは、メタ記憶質問紙に含まれる質問項目の内容が異なっているだけでなく、質問形式が異なっていることと関係しているのかもしれない。すでに述べたように、EMQ と CFQ では日常生活のなかで特定の記憶行動や記憶現象の絶対

的または相対的出現頻度が問われるのに対して、MAQ では日常生活での自己の記憶能力に関する個々の記述文が調査協力者自身に“あてはまるかどうか”を評定するよう求められる。つまり、MAQ では、日常記憶に関連した自己像の主観的評価が求められる。そのため、たとえば、ある調査協力者が“自分は非常に忘れっぽい”と自己の記憶能力を主観的に低く捉えていたとしても、実際には、忘れ物をしたり、約束や予定を忘れていたりする頻度が通常の場合に比べてさほど多くないという可能性が考えられる。逆に言えば、MAQ の場合、実際にはまれにしか見られない行動や現象であったり、あるいは実際のエピソードにさほど裏付けられていなくても、調査協力者本人が印象深く捉えていることが強調して反映されるのかもしれない。

引用文献

- Boake, C., Freeland, J. C., Ringholz, G. M., Nance, M. L., & Edwards, K. E. (1995). Awareness of memory loss after severe closed-head injury. *Brain Injury*, 9, 273-283.
- Broadbent, D. E., Cooper, P. F., FitzGerald, P., & Parkes, K. R. (1982). The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology*, 21, 1-16.

- Cohen, G. (1996). *Memory in the real world*. 2nd ed. Hove: Psychology Press.
- Cornish, I. M. (2000). Factor structure of the Everyday Memory Questionnaire. *British Journal of Psychology*, **91**, 427-438.
- Herrmann, D. J. (1982). Know thy memory: The use of questionnaires to assess and study memory. *Psychological Bulletin*, **92**, 434-452.
- Herrmann, D. J. (1984). Questionnaires about memory. In J. E. Harris & P. E. Morris (Eds.), *Everyday memory, actions, and absent-mindedness*. London: Academic Press. pp. 133-151.
- 楠見 孝 (1991). '心の理論'としてのメタ記憶の構造——自由記述, 記憶のメタファに基づく検討—— 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 705-706.
(Kusumi, T.)
- 楠見 孝・高橋秀明 (1992). メタ記憶 安西祐一郎・石崎 俊・大津由紀雄・波多野誼余夫・溝口文雄 (編) 認知科学ハンドブック 共立出版 pp. 238-250.
(Kusumi, T., & Takahashi, H.)
- Pollina, L. K., Greene, A. L., Tunick, R. H., & Puckett, J. M. (1992). Dimensions of everyday memory in young adulthood. *British Journal of Psychology*, **83**, 305-321.
- Seltzer, B., Vasterling, J. J., Hale, M. A., & Khurana, R. (1995). Unawareness of memory deficit in Alzheimer's disease: Relation to mood and other disease variables. *Neuropsychiatry, Neuropsychology, and Behavioral Neurology*, **8**, 176-181.
- Sunderland, A., Harris, J. E., & Baddeley, A. D. (1983). Do laboratory tests predict everyday memory? A neuropsychological study. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **22**, 341-357.
- Sunderland, A., Harris, J. E., & Baddeley, A. D. (1984). Assessing everyday memory after severe head injury. In J. E. Harris & P. E. Morris (Eds.), *Everyday memory, actions, and absent-mindedness*. London: Academic Press. pp. 193-212.
- Tinson, D. J., & Lincoln, N. B. (1987). Subjective memory impairment after stroke. *International Disability Studies*, **9**, 6-9.
- 山田尚子 (1999). 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, **47**, 501-510.
(Yamada, N. (1999). Error proneness questionnaire: Construction, reliability and validity. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 501-510.)

——2004. 9. 2 受稿, 2006. 5. 7 受理——